

佐々木聰 『復元 白澤圖』

坂 出 祥 伸

本書の内容は、腰帯の贊辭を借りれば、「禍を避け福を招く神獸白澤、その源流は古代中國の辟邪呪術を伝える幻の書物だった。散佚した奇書を復元し、文化史的意義を読み解く」とあるのが簡單ながら意を盡くしている。「白澤」といつても今日その意味のわかるひとはほとんどいないだろう。『廣辭苑』には、「中國で想像上の神獸の名。よく人語を話し、有徳な王者の治世に出現するといふ」と記されている。我が江戸時代に厄除けのお守りやおふだとして廣く民間に重用されていたこと、さらに道教に由来することは拙著で紹介したのであるが、本書著者の佐々木氏の博搜ぶりと執念深い探究心に敬意を表

するとともに本書の紹介者として「つまみ食い」的に白澤圖を紹介したにすぎなかったことを恥じ入る次第である。¹⁾

佐々木氏の本書が出版されたのは奇しくも、その名が白澤社である。そこで出版社に直接問い合わせたら、出版社側から白澤の研究者を探し求めて佐々木氏に行き当たって本書の出版を依頼したのだそうである。

まず「まえがき」では、妖怪としての白澤はアニメなどでひっぱりだこになっている現況が紹介されている。「いわゆる妖怪のことなら何でも知っている白澤という存在は、お化け好きの琴線に觸れるものがある。その人

『復元 白澤圖』

一〇六

氣は現代に引き継がれており、私たちはしばしば、漫畫に、アニメに、小説に、とマルチに活躍する白澤を目にする。このように、白澤はすっかり現代の妖怪カルチャーの中で、確固とした地位を築いている」と。

現今では、「妖怪學」という學問分野があるそうだ。

本書もその分野の著作のひとつと考えるとよいだろう。けれども「あれほど白澤の姿がたくさん描かれた江戸時代でも白澤圖という書物は半ば忘れられてしまった。それは今日も同様に、白澤というキャラクターは漫畫や小説で知られていても『白澤圖』を知る人はあまり多くないのが實情である」という理由による。そこで著者は、「白澤圖」原文の復元(この章に著者の精力が最も注がれている)、現代語譯と解説、さらに派生したさまざまな文物を紹介するのである。

全體の構成を示しておく。

第一章 『白澤圖』とはなにか―その傳説と成立

一、白澤傳説 黃帝、白澤と出會う 『易』の影響

二、『白澤圖』の成立と鬼の名前を呼ぶ辟邪方法

鬼神世界の名簿 鬼神の名前を呼ぶ呪言

三、『白澤圖』と『山海經』 禹鼎傳説との類似

『夏鼎志』の怪異觀 自然に起こる現象としての怪異

四、『白澤圖』以降の白澤文物 『白澤地鏡』と地鏡

經 莫高窟から見つかった『白澤精怪圖』『禮緯含文嘉』地鏡經・精魅篇

第二章 『白澤圖』輯校

白澤圖の分類と配列について 五行(木・火・

土・金・水)の性格を持つ精魅

山谷の精魅、場所の精魅、建物・宅中の精魅。

器物の精魅・動物の精魅・氣象の精魅・その他の精魅・龍の化身・怪異占として引かれる例

第三章 神獸白澤の姿―辟邪繪としての白澤の圖

一、辟邪繪としての「白澤の圖」明代の白澤の圖

二、日本の「白澤の圖」「白澤避怪圖」

白澤避怪圖の贊 傳雪舟筆の白澤避怪圖 『涉

世録』と『事林廣記』 宗教者の辟邪書から一

般向け縁起物へ

三、白澤の姿

人面牛身が一般的な日本の白澤 本場中國の白澤の姿 龍首型と虎首型 羊が白澤に變化する 敦煌寫本の白澤の圖

補章 「白澤」研究の軌跡

一、神獸白澤とその圖像研究

二、『白澤圖』の資料研究

附録 『禮緯含文嘉』精魅篇

右文中の細字は内容を箇條書きで示しているの、これによって全貌が理解できるのであるが、いくらか補充しておきたい。

白澤圖は古代の傳説上の天子・黃帝が作ったのであり、それは瑞祥を集めた圖鑑『瑞應圖』によっているという。その瑞應圖には、黃帝が白澤と出會ったとの記述があるが、その傳説は後に宋代に編纂された道教經典『雲笈七籤』に收められた『軒轅本紀』という黃帝傳では、より詳しくなり、そこに怪異の數が「一萬一千五百二十種

類」と記されていて、著者はこの數字に着目し、これは『易經』繫辭上傳に見える萬物の數としての乾坤二篇の策數に相當するという。そして、さらに後世、北宋時代の眞宗のもとに軒轅皇帝(黃帝)が神人として降臨するなど、易經が道教と深くかわるようになる。

『白澤圖』が登場する古い文獻は四世紀ごろ晉代の『抱朴子』『搜神記』であるが、これらには、呪符として言及されている。『白澤圖』は『抱朴子』登涉篇によれば『百鬼錄』『九鼎記』とともに鬼神(精鬼)の名・字などの素性を記したものであろう。だからこれを明らかにすれば、精鬼が撃退できるという。それは『抱朴子』と同時代の文獻『女青鬼律』の記述によってわかるし、もつと具體的には近年出土した呪符木簡の記述によって知られるという。鬼神の名を聲に出して呼ぶという辟邪の方法も成立する。

ついで『白澤圖』と『山海經』も禹鼎傳説について深い關係をもっていること、さらに『抱朴子』登涉篇に引かれている『夏鼎志』とが類似の内容をもっていると説

『復元 白澤圖』

く、ただし、このあたりから著者の解説は非常に苦澁していて、論旨を追うのに苦勞する。結論として著者は、『白澤圖』と『夏鼎志』とがよく似た内容・理念をもつ書物であることを示した。『山海經』と『白澤圖』を比べて考える時も、その間にある『夏鼎志』の存在を踏まれば、それぞれの關係をより深く理解できるだろう。

精魅の名前を呼ぶ辟邪呪術が『白澤圖』にのみ見える点など、その特徴もまた見えてくるのである」と結んで、次の『白澤圖』以降の白澤文物へ進んでいく。ここでは、『白澤圖』が成立した後、「白澤」の名をともなった書物、例えば『新增白澤圖』『白澤地鏡』などが現れたことが紹介され、さらに敦煌出土の寫本の中に『白澤精怪圖』と稱される本来の『白澤圖』とは性格の異なった文獻の性格が検討される。これは怪異占書であって、本来の白澤圖にはそういう性格はない。拙著での早合點が間接的ながら指摘されている。

次は第二章『白澤圖輯校』であり、一〇四頁、七六條を割いて逸文が収録されている。おそらく著者がもつと

も時間と努力を費やしたと思われる。

第三章は「神獸白澤の姿―辟邪繪としての白澤の圖」と題して、主に我が國に傳來し盛んに紹介された『白澤圖』の検討紹介である。なお、「白澤の圖」と稱しているのは、書物としての『白澤圖』との混同を避けるためである。

最後に補章と題して江戸時代から近年に至るまでの、フランス・アメリカの學者をも含めた「白澤」研究の歴史が跡づけられている。

附録として北宋初期に成立したと推測される緯書の體裁をよそおった『禮緯含文嘉』精魅篇が原文と譯注を附して掲載されているが、これは臺灣國立博物館と浙江圖書館にのみ傳存するという稀觀の文獻である。

以上の紹介は十分には意を盡くしてはいないが、本書はまったく白澤あるいは白澤圖の全貌を委細にわたって叙述していて、中國の辟邪文化はもちろんのこと、中國文學、道教を含む中國思想、さらには中國の民俗學に關心を寄せる人々にぜひとも読んでいただきたい好著であ

る。

註

(1) 『日本と道教文化』(角川選書、二〇一〇)第一章
「疾病除けの靈符「白澤」と妖怪百科としての「白澤
圖」。

(四六判、一七六頁、二〇一七年一月、
白澤社、二〇〇〇圓(税別))